

# ひとつの回想——父と私



## 有賀鉄太郎

私の家を訪れたことのある方は客間に掲げられている偏額の一つを記憶しておられることであろう。そこには「一団和氣、懷遠丸將、有南洋之行、書此以當錢、榎本武揚」の文字が記されている。それは私の生まれる八年前、明治二十四年のことである。榎本子は当時南洋貿易を企て、そのため恒信株式会社を設立させ（社長は横尾東作）、いよいよ最初の貿易船をパラオ群島に向けて出発させるということになった。その時の乗船が七十二トンの

帆船懷遠丸である。乗組んだのは十四名であったが、そのうち九名は船員であった。そのとき現地での副支店長という資格で一行に加わったのが二十三歳の青年有賀文八郎であった。これが私の先考である。出帆の日も近づいたある日、榎本子は一行のため向島の植半楼に宴を設け、その席上唐紙に前掲の文字を認めて文八郎に与えたのであった。それから七十数年、幸いなおよく保存されている。榎本子は元来海軍々人であったから、国防的、軍略的な見地から南洋諸島に目をつけていたことは確かである。その頃、そこはスペ

イン領であった。のちドイツ領となり、第一次大戦後は日本の委任統治区域となって第二次大戦に及んだことは人々の記憶にまだ新しい。それはそれとして、一行中英語のできる者は文八郎だけであったので、誰よりも最もよく諸般の対外交渉に当たったようであるが、目的地で支店が開設されたのち、報告のため帰国することとなり、明治二十五年四月に再び懷遠丸の人となった。帰国後直ちに榎本子を霞ヶ関の外相官邸に訪ね一部始終を報告したが、そのなかに支配人青柳氏の溺死という悲しい出来事もあった。それはこう言うわけである。パラオのコロール港に碇泊中懷遠丸からスペイン船を尋ねるため青柳氏が操縦するヨットに同乗したが、途中突風に遭って顛覆した。助手の少年と文八郎とは九死に一生を得たが、泳ぎを知らなかった青柳氏は浪に吞まれて不帰の客となられた。この人は文八郎にとって同郷の先輩であり、恒信株式会社に入社を勧められたのも、この人からであったので、この人の死は精神的にも大きな打撃であったらしく、理由はこれだけではなかったにせよ、ともかく辞職を決意し、榎本子の希望にもかかわらず、ついにパラオには帰任

しなかった。

2

このように父のことを書いているのは、妙な言い方だが、これが私の父だからである。

実は私は幾十年も、父は父、自分は自分と考えて、私自身の道を歩いて来たつもりでいたのだが、齢を重ねるに従って、父から聞いた事を思い出し、また残した手記などを読んでいるうちに、父子の間に性格や経歴の大きな相違があるにもかかわらず、両者に共通の宿命のようなものがあることを感じて驚くのである。

父は福島県西白河郡の農村に生まれた。そこは越後高田藩の陣屋があったところで、吉田という奉行が代々の支配者であった。その最後の奉行は、後年、東京で私どもの家によく遊びに来たが、子供心にも何となく気品を感じさせる人柄であった。かつては三万三千石を受け、二百人の武士を従えていたが、北上した官軍のため一たまりもなく打ち敗られ、陣屋は焼かれた。この歴史的背景を考えれば、東北人、とくに福島県人あたりが明治の社会に、どのような状況に置かれていたかがほぼ

察しられるであろう。父の故郷からは西に那須の連峯を望むが、その中ほどには活火山の白煙が立ちのぼっている。若き日の父は、それを眺めるごとに薩長の勢力に対する憤慨の念を燃やされたという。父がのちに榎本子の傘下に入ったのも偶然とばかりは言えないように思う。かれは十五歳のとき白河に出て勉学、やがて小学教員の生活に入った。のち外国貿易を志して東上し、その最初の経駐が先に述べた南洋行きだった。その後インドに二度行っている。この事はかれの宗教心にとって重要な影響を与えたことになる。それまでは、キリスト教を信じていたが——教員として道徳教育の無力を嘆じ、キリスト教に依るより外に道がないと悟って信者になった、というのがその動機である——インドにおいて英国人の圧政ぶりを見て、キリスト教に対する少なからぬ疑惑を抱くとともに、かの地のイスラム教徒に接して、コーランの教に引きつけられるものを感じた。父が本格的にイスラムに入信したのは、それから四十年ものことであるが、その最初のきっかけはインド訪問にあった。貿易の用務で海を渡ったのだが、得たものは物質的財貨ではなく、一つ

の精神的影響であったわけだ。貿易事業における父の仕事はそれ以上の進展を見せなかった。

3

その後のかれは貿易よりも、むしろ国内での実業に従事した。大阪在住のころ宇治川水電の創立計画にあずかったが、その成功は父に少なからぬ自信を与えたようだ（明治三十九年四月設立許可）。それから間なく東京に引返して一戸を構えた。だがその後の仕事には成功よりも失敗の方が多かった。その原因の一つは父が根っからの経済人ではなかったということである。たとえば明治四十四年に中国の辛亥革命が起ったが、父は革命軍を援助するための計画を立て、私費を投じて上海に渡り、宗教仁とその秘書北輝次郎との三人でひそかに策を練った。南京が陥落したとの報を得たとき、人々の制止を振りきって通訳とともに南京におもむいたが、それは危険極まる冒険であった。宗教仁は南京政府の要職につく予定であったので、それが実現の暁には河野広中氏を新政府の最高顧問とするというのがかれら三人の密議の内容であったが、やが

てこれは革命政府の正式決議となり、父はそれをもちまして東京に帰った。河野氏もそれを欣然受諾し、時の参謀総長も外務大臣もそれに賛成で、父を大いに激励したとのことである。ところが北氏から長文の電報が入り、

孫逸仙が袁世凱に六ヶ月間大總統の地位を貸すことになったことを報じて来た。さすがに河野氏はこの電文を一読しただけで袁氏の野望を見ぬき、これは孫氏の大きな誤りであると、身を振わせて言ったという。宗教仁は袁氏のもとに大臣となったが、孫氏との打合せのため上海に赴き、また南京に帰ろうとして駅に入ったとき刺客に襲われ、ピストルで撃ち殺された。言うまでもなく袁氏の謀略であった。他にも犠牲者は次々に出たようである。こんなわけで父の計画も一切水泡に帰したわけである。血にまみれてたおれた宗氏の写真は長い間私の家にあつたが、今はどこに行つたか判らない。

父がこのためにどれだけの私財を投じたのかわかる由もないが、ただ利を求めたのなら、このようなことを思いつくわけはないであらう。かれは清国政府が反日的であることを嘆き、親日的な革命派を援けることによって中

日の関係を好転させようと考えたのである。北輝次郎と結んだのではあるが、かれの革命理論そのものにどれだけ共鳴したのか、それはむしろ疑問である。いずれにせよ、父はそのような理論家ではなかった。

かくして明治は終り大正に入るのであるが、その頃私は小学校から中学校に進学していた。北氏はその後もしばしば東京原宿の家に父を訪ねたので、私もかれと親しくなり、かれの一種情熱的な人柄に幾分の魅力を感じていた。だが革命理論など聞かせてももらえなかつたし、聞いても理解できなかつたろう。父と北氏との関係もその頃までで絶えたように思う。

#### 4

波瀾に富む父の生涯から若干のエピソードを選んで、これによつてその人間の幾筋かの線を定めようとしたわけだが、そこには明治・大正の社会にあつての一東北人の悩みと苦闘のあとが偲ばれる。東北の農民で、資産も学歴も全くない人間が当時の日本で志を伸ばすことは容易ではなかつた。父は父なりの正義感を強く持つていて、日本のために何か

為すところあろうとしたのであるが、その一生を顧みて、順風に帆をあげたような期間は有つたとしても稀である。むしろ難航の生涯であつた。父が東京にもどつて居を定めたのは青山四丁目から北に少し入つたところで、当時はまだ郡部に属し、千駄ヶ谷字原宿と呼ばれていた。そのあたりは山の手の新開地で、その広々とした屋敷の主人公たちは、みな政界、財界、軍部等の有力者であつた。そのなかに東北の人間などほとんどいなかったと言つてもいい。父は農村出身の野人であることを常に誇りにしてはいたものの、息子には一人前の教育を受けさせたいと思つたらしい。お前は法律を勉強して自分の仕事を助けたいとよく漏らしたものである。

そんなわけで、原宿に移るとともに、私は家から程遠からぬ青山師範附属小学校に入ることになった。一年生は大阪ですませたので二年に編入されたわけであるが、算術と読方の試験をされたことを覚えてる。当時青山師範附属から府立一中への入学率は高かつた。明治四十四年春、私も無事入試に合格した。私はその頃身体虚弱で、しばしば病気になるたが、中学四年生になつて間もなく、危うく

命を失うほどの大患にかかった。二カ月間赤十字病院にいて、幸い一命は取りとめたが、その学年は通学に耐えず、休学した。そして一年遅れて大正六年三月に卒業したのであった。

第一次大戦の発端になったオーストリア・ハンガリアの皇太子暗殺を報じる号外を手にしたのはその入院中のことであった。ちょうどその頃、父の仕事にも危機がおとずれて、かれを経済的に没落させるに足るほどの損失が明るみに出つつあった。病後で極度に敏感になっていた私の神経には、健康上の不安と生死の問題、わが家の経済、それに欧州から世界に広がる戦火、それら内外の難問が一度に襲いかかって来た。病気をしてから卒業するまでの三年間、私の魂は耐えがたい重荷を感じ、とりわけ身近な生死の問題は、私をしばしば絶望感に追いやった。私はしかし、かすかな光を芸術のうちに、むしろ自然そのもののうちに見出すことができた。白樺を読んで武者小路さんの言論に共鳴し、また毎号紹介されたミケランジェロ、ダ・ヴィンチ、レムブラント、ゴッホ、セザンヌなどの作品にたまらない喜びを味わった。劉生や荘八の個

展も欠かさず訪れた。それとともに、武者小路を通してトルストイのヒューマニズムと平和思想に触れ、それがやがて私を新約聖書に行かせることになった。私をキリスト者にしたのは、誰よりもまず武者小路さんだったわけだ。

だが直ぐそうだったのではない。私は教会に行くようになって、なかなか洗礼を受ける気にはなれなかった。ただ何か追いつめられたようになって、一中の教育——いわゆる一中、一高、東大のコース——とは全く違った別の方向を求めたのであった。それではどうすればいいのか。私には判からなかった。一面には何もかもが——人間も世間も、自分の家も、また自分自身さえも——暗黒のうちにあるように思われたが、他面、自然の美は私の目を驚かせ、イエスの言葉は神の国の近きを告げた。

私が同志社について知り、そこで神学を学ぼうと思うようになったのは、そのような状況においてであった。大正六年二月に受洗し、四月には神学部予科一年に入学した。私の一生の方向はこれで決まったのである。それは全く「なんじの親族に別れ、なんじの父の家

を離れて、わが汝に示さん其の地に到れ」という声を聞いたアブラハムの心境にもせらるべきものだった。父が私にかけた期待は裏切られた。青山師範や府立一中の教育方針にも背を向けたことになる。しかし私は同志社に来て解放の喜びを感じた。そこには完全な自由があったし、先生方には愛があった。どこにも見出せなかったものを、私はそこ見出したのである。それが私を力づけ、勉強することに意義を感じさせてくれたのである。真理のために真理を追究する熱意も、ここで養われたものである。

だが考えて見ると、これは父の意思にそむいたかのようで、実はやはり父のあとを——違った形、違った意味においてではあるが——継いだことになるであろう。野人の子はやはり野人でなければならなかった。その後私について語ろうすれば、それは内面の問題、思想発展の経過に触れなければならないが、今は止める。ただ私が同志社で養われたものを、いとも貴い心の財宝として、今も秘蔵していることを告白してこの稿を終りたい。